

思想としての人類学を再考する

マリリン・ストラザーン著『部分的つながり』を介して

大杉高司（一橋大学大学院）

フィールドで観察される事象の個別具体へのこだわり、対象の細部やそれをとりまく背景への執拗なまなざしは、人類学の重要な特色であり続けてきた。しかし、特定の地域や活動領域の詳細をドキュメントするに終始したり、微細な権力関係や、それに対抗する多様な声や活動が単一原理に収束することなく響き合うさまに着目したりするだけでは、思想としての人類学が胚胎してきた知的ポテンシャルを自ら過小評価することになるだろう。前者を特徴づける差異への鋭敏さは、私たちが住まう世界の豊かな多様性を描きだすものの、差異や多様性をとらえるパースペクティブのあり方そのものを温存して、多文化主義や多元主義を生みだした知の体制を反復再生産するだろう。また、後者が見いだす行為主体性や多声性は、私たちが自らの日常で感知し、また感知するよう「呼びかけ」られてきた行為主体性や多声性と同型的であるからこそ、価値づけられてきたともいえる。両者に共通するのは、観察する私たち自身の知の組み換えを促すほどまでに、他なる個別具体がもつ喚起力を活用し損ねている点である。

人類学が学知の対象とする「人類」が如何なるものであるか、未だ私たちは知らない。しかし、人類学が他の諸学には無謀と映るほどに視野をひろげ、そこかしこに鋭いまなざしを向けつつけるのは、そこで見いだされる個別具体が、「彼ら」の知を映し出すばかりか、未だ知らぬ「私たち」自身の知を予感させるのを期待するからに他ならない。人類学がフィールドから持ち帰るのは、「彼ら」の知であるばかりでなく、「私たち」自身の新たな知と在り様への予期である。だから、この学がいう「人類」とは常に潜勢態でありつづける。そして、思想としての人類学の強みとラディカルさは、理論や分析枠組みの切れ味にある以上に、他なる個別具体を経由した絶えざる自己変革力、自己生成力にあるといえるだろう。

こうした立場に重要な参照点を提供しているのは、マリリン・ストラザーンの理論的主著『部分的つながり』（1991）である。本書でストラザーンは、メラネシアにおいて、一人の人格や一つのモノが、それを取り囲む諸関係や、その関係によって部分的につながる複数の人格・モノ・自然を畳みこむように内包していること、そして、この内包された形象の引き出し合いのうちにメラネシア的な社会性があることを、多彩な事例にもとづいて論じている。ところがストラザーンは、この社会性をメラネシア特有の認識であるとして多元主義のもとに包摂することを良しとしない。むしろ彼女は、メラネシアの社会性を、多元主義を含む私

たちの分析枠組みや理論と同一水準の知の具体化とみなして、そこに、部分と全体をめぐる論理学、一と多の二者選択をせまる算術、そしてその派生である多元主義やパースペクティブアリズムへの、根源的な挑戦を読みとる。

他方でストラザーンは、メラネシアの社会性の類比物を、数学のフラクタル理論、フェミニズム批評のサイボーグに見いだす。全体の一部を構成する部分に、全体がもつ複雑性が回帰的に現れる現象、人と機械が互いの拡張となって、一方が他方に潜在する可能性を実現する様相は、たしかにメラネシアの社会性をよりよく理解する手掛かりとなる。しかし、彼女がフラクタル論やサイボーグ論を理論＝用具として活用しながら、メラネシアの事例を分析したと表現するならば、それは事情の一面を捉えているにすぎない。ホームで繰り返される反芻のなかで、他ならぬメラネシアの社会性こそが、彼女をしてフラクタル論やサイボーグ論を発見させ、同時に、それらを数学やSFの秘儀的な領域から解放させたのだともいえる。

この対称性をもっともよく示しているのは、本書の結論部で展開される、西洋とメラネシアを図(地)と地(図)の対と捉えるパースペクティブである。土地は動かずに人が旅をする西洋と、人が動かずにモノに旅をさせ、そのことによって今ここに複数の場を実現するメラネシア、断片化に有機的全体性の喪失をみる西洋と、切りだしに諸関係と派生＝成長の源をみるメラネシア、などなど。この対の提示において、ストラザーンは西洋とメラネシアの双方を視野に収める特別な第三点を設定したのではない。むしろ彼女は、メラネシアを西洋に準拠して眺めるのと同時に、西洋をメラネシア版サイボーグに準拠して眺め返す。そして私たちは、地であったはずの西洋の理論が、メラネシアという地を背景として、ひとつの図＝事例として浮かびあがるのを目の当たりし、その変容可能性を感知するのである。

ストラザーンが実現するこの対称性は、人類学において決して真新しいものではない。黎明期のヴィクトリア人類学においてさえ他者を経由した新たな自己知の獲得が賭けられていたし、野生の思考に依拠する構造主義が弁証法の支配に強い衝撃を与えたことは記憶に新しい。本分科会では、ストラザーンが改めて提示するこの対称性が、今日どのように再生＝更新されるのか、それがどんな新たな知と存在のありようを予期させるのかを、複数の角度から問いたい。

キーワード：部分的つながり、対称性、思想としての人類学